

[成果情報名] イチジクの年2回収穫栽培

[要 約] イチジク‘榊井ドーフィン’の年2回収穫栽培は、春から伸張している結果枝を8月に切り返し、新たに発生した結果枝新梢（夏枝）に9～11月に果実を着生させる。切り返した結果枝に残った果実は8～10月に、夏枝の果実は12～3月に収穫することで、年2回の収穫が継続して可能となる。

[キーワード] イチジク、加温栽培、年2回収穫

[担 当] 静岡農林技研・果樹研セ・落葉果樹科

[連絡先] 電話 053-428-3141、電子メール kaju-rakuyo@pref.shizuoka.lg.jp

[区 分] 果樹

[分 類] 技術・参考

[背景・ねらい]

イチジク‘榊井ドーフィン’において、労力分散と規模拡大を図るため、年2回収穫ができる作型を開発する。また、この作型を継続して行った場合の樹体生育と果実着生及び収量・品質への影響を明らかにするとともに、果実収量を増加させる手法を検討する。

[成果の内容・特徴]

- 1 イチジク‘榊井ドーフィン’で冬期(12月～3月)に収穫する作型は、春から伸張した結果枝(春枝)を8月に15節前後で切り返し、発生する副梢(夏枝)に着生した果実を利用する。残した春枝に着生した果実は、8月～10月に収穫できるため年2回の収穫が可能になる(図1、写真1)。冬期収穫終了後に3月末に春枝の基部まで戻ってせん定を行い、新しい結果枝(春枝)を発生させる。
- 2 年2回の収穫を継続して行った場合でも、春枝の生育不足等の樹勢の低下はみられない。冬期に収穫される果実は夏秋期に収穫される果実より小さいため、収量が少ない(表1)。
- 3 春枝1本から発生する夏枝の本数を2本とすることで、結果枝の生育を低下させずに収量を増加させることができる(表2)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 冬期に収穫される果実の重量増加対策の検討が必要である。
- 2 春枝を切り返す位置は、16節で15mm程度の太さが適当であるが、結果枝がこれより強勢の場合は切り返す位置を高くし、弱勢の場合は低くする。

[具体的データ]

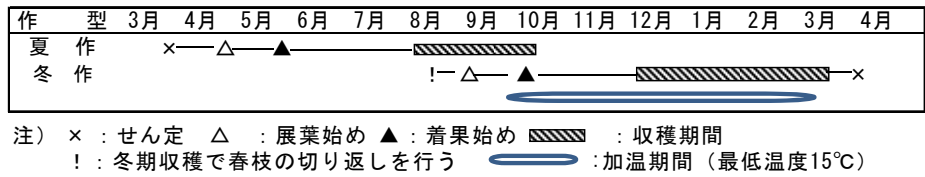


図1 イチジク‘榊井ドーフィン’の年2回収穫作型の管理法

表1 イチジク‘榊井ドーフィン’の年2回収穫作型での樹体生育と果実収量の推移

植栽後年数	結果枝長 (cm)		収量(kg/a) ^z		果実重(g)	
	春枝 ^y	夏枝	春枝	夏枝	春枝	夏枝
2	230	98	135	127	86.4	75.8
3	233	105	199	103	86.0	67.6
4	210	88	212	86	84.5	61.6

注) z : a 当りの結果枝本数を185本として算出
y : 春枝結果枝長は切り返しせん定を行う前の長さ(8月上旬)



写真1 イチジク‘榊井ドーフィン’の年2回収穫作型での果実着生

表2 イチジク‘榊井ドーフィン’の冬期収穫作型における春枝1本当たりの夏枝本数の違いが樹体生育と果実収量及び品質に及ぼす影響

処理	結果枝長 (cm)	節数	基部径 (mm)	収量 (kg/樹)	収穫果数 (個/樹)	果実重 (g)	糖度 (Brix)
1本	92.3	21.6	16.1	1.50 b ^z	23.3 b	64.8	17.6
2本	103.0	22.2	15.5	2.34 ab	39.2 a	58.7	18.1
3本	84.6	19.3	13.8	2.93 a	53.6 a	55.7	17.5
分散分析	n. s.	△10	△10	**	**	n. s.	n. s.

注) z : 同一欄内の同一符号間にはTukeyの多重検定(5%水準)で有意差なし

[その他]

研究課題名：施設園芸における高度環境制御利用等による高生産システム技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2008～2010年度

研究担当者：鎌田憲昭